

連載

ああ、猪獺泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市

田宮

治

色んなことがありました：



② 失くして学んだ単独獺の基本

●「いい」その「時」が

「よしよしよし、終わり」の
声も何となく弾み、頭や体を撫
でると、子犬はいつの間にか立
派な体になっており、力強ささ
え感じた。薄暗くなった山道を、
愛犬達と話しながら帰ったが、
「やっ」と、ここまで来れた」の
実感に、素直に喜ばずにはいら
れなかった。

このことを境に、わが家の愛
犬の芸は見違えるようになるの
だが、頼りの「アカ号」は、そ
の年の猟期に戦死するのである。
今思うと、全体的に犬群の力不
足であった。「良い子は短命」
を身をもって思い知らされた。
「アカ号」を失った私の落胆は
大きかったが、後釜の「アカ号」
の子の「ミス号」によって、や
つとのことで強力な犬群が出来
上がったのである。

このことに力を貸してくれた
のが徳島の西岡さんだった。西
岡さんは寡黙な方であるが、真
面目で実直なベテラン獺人で、
困ったときには今でも電話をし
て、相談にのっていただいてい
る気骨のある四国男児である。
特に獺犬の訓練は素晴らしく、

私の犬群の「クルミ号」(屋久島
犬・牝)は、子犬のときに四国ま
で送って、訓練していただいた
犬で、獺芸もさることながら、
良い子を出すようになっていた。

「クルミ号」が産んだ牡犬の
一番子が梅元さんに差し上げた
犬だが、「イノシシの頭に強引
に咬みつく楽しみな犬になっ
た」と、嬉しい連絡が来ている。
西岡さんの血統の犬は、後に知
ったのであるが、同じ徳島であ
る長谷川犬舎の血が50%ほど入
っているとのことだが、「ブル
号」をはじめ、亡くなった「シ
ロ号」、そして「クマ子号」と、
皆素晴らしい一級品で、良い芸
で私を楽しませてくれている。

西岡さんは身体が悪いので、
いつも心配しているのだが、
心の優しい方で、私が送った「コ
ブシ号」をいつも褒めてくれ、
私を気遣って「バリバリの一級
品だよ」と言ってくれる。彼の
ことは、欲得抜きにしたかけが
えのない友人と想っている。い
かに単独獺と言えども、誰かの
助けが必要であり、今は友の大
切さを痛感して感謝にたえない。
振り返れば、今日は連休の5
月5日。妻と娘と三人で紀州犬



名犬「アニー号」の孫達。(左):「勝号」、(右):二代目「リオ号」

の子2頭を連れ帰り、舞い上がったあの日から15年が経っていた。まさに「苦節15年」といったところか。折しも、あのと時同様に、ツツジが真つ盛りである。

現在、犬舎は遅しい猟芸の子達でいっぱいだが、ここまで来るには失敗の連続で、実に長い泣き笑いの道程だった。まだ未熟だった私のせいで、山野に命を散らしてしまった「アニー号」や「ミス号」「シロ号」「アカ号」、その他の子達の命を、「猪犬の宿命」などと言って済まされるものではない。

その命と引き換えに、私に教えてくれた幾多の教訓を大切に、反省することで自らの猟技術を磨き、元気で可愛い愛犬達

を守るこのことができる猟人になれるよう頑張りたい…などと考えている昨今である。

●子犬選びについて

「子犬選び」は、大袈裟に言うなら「狩猟の原点」である。

良い猟犬なくして、満足する猟はできない。ことを見ても、子犬選びはなかなか難しい問題である。初めて子犬を求めて、一生懸命訓練しても、すんなりと良い猟犬にはならないと思う。それは、訓練する側である猟人が「真の実猟人」になっているかどうか、ということである。

つまり、子犬を育てる↓訓練する↓そして仕上げる。この一連の行為を迷うことなく、自信をもってできるか、ということである。猟人の猟犬を見る力によつて、子犬の良い性格や体形、そして猟能の秘められた奥の「本能」などが見えてくるのであり、猟人の実力こそが良い子犬を選べる基本である。

「子犬選び」と「訓練」は、まさに達人が名犬を作る「合わせ技」である。「猟野での使用犬を見れば、猟人の腕前までも自ずとわかる」と言われるように、

仕上がった猟犬は、たいいていの場合、主人の実力並みということである。

「最近、腕を上げたよ」と言う猟人がいたとすると、必ず猟犬の芸も上がっているはずである。つまり、そうした大切な関係こそが「狩猟の世界」なのである。子犬を選ぶことも、訓練することも、猟人の経験に培われた猟能力がモノを言うのである。猟人たる者、常に狩猟に対する確かな目と猟技術の向上を忘れてはならない。

訓練の結果、「名犬」となつて喜ぶのも、またダメ犬にしてばやいてみても、その原因を考えたときに、双方同じようなこと、つまり猟人の腕によるのだと思う。

それらを前提にして、では、どのような子犬を選ぶか? であるが、まず第一は、「自分に合った子犬」ということになる。子犬は、自分の猟法や体力を考へて選びたいものだ。紀州犬であっても、屋久島犬であっても、四国犬であっても、必要以上に犬種にこだわらなくても、ただ一つ「猟能はどうか?」ということで、親犬が代々猟犬であり、

優れた猟芸を持った犬の子犬を選ぶことに尽きると思う。

また、子犬選びで参考になり、大切なものに「血統書」があるが、最近の狩猟界で猪猟に貢献している「一流犬」と思われる犬種には血統書はない。猪猟に秀でた先達が、一つの犬種に飽き足らず、他の一犬種の良い性格を取り入れたりしながら猪猟に向く犬、つまり、「猪犬専門」の犬作りをしたのである。

猪犬は、血統書がなくても、すでに固定している犬種で、実際に猟でイノシシに当ててみるとなかなかのもので、すでに血統書を持つ犬種を超えて、現在の猪猟犬の主流をなしている。このように、猪犬は実猟に使ってみないことには、いくら血統書を見たところで素人には、どうなるものではない。

血統書を見て決断が下せるほどまで極めるには、並大抵の努力や労力ではない。どのような「道」であっても奥が深く、掘り下げればきりが無いのが常である。それゆえ、いたずらに年月を費やすことにもなりかねない。猪猟をするのであれば、色々考えずに、猪猟一筋の「猪猟犬」



訓練中の「ミス号」の子犬(赤穂市・主田氏より)

の子犬を求めるべきである……と
言いたい。

現在、私が自信のある猪犬が
持てるまでになった体験から言
えることは、まず「自分は、ど
のような狼を目標にするか」を
はっきりさせることである。目
標が「猪狼」で、しかも「単独
狼」ならば、求めるのは「イノ
シシの止め犬の子犬」であり、
これで決まり……となる。

当然のことであるが、自分の
好きな犬種の中から、猪狼犬の
「止め芸の優れた犬」の子犬を
求めるとよい。単独狼では、何
と言っても犬がイノシシをがっ
ちり止めてくれないことにはど
うにもならない。それなら「強
力な咬み止め犬で」と考えたい
ところだが、実は、ここが誰も
がはまる落とし穴である。

イノシシを狩る犬だから、大
きくて強い犬でなければ……とい
う考えは捨てるべきである。大
きくて強い犬が素晴らしい止め
芸をするだろう……と思ってい
るうちは、私もそうであったが、
まだまだ素人である。

現実には、狼野で優れた止め芸
を1頭でもやっつてのける狼犬は、
決して大きい犬でも強い犬でも
なく、むしろ「この犬が……？」
と思うほどの小さい犬で、性格
もおとなしく、子供(わが家の
場合は孫である)ともよく遊ぶ
ような犬である。

わが家の愛犬の中で、このよ
うな芸をするのは「クマ号」で
ある。「クマ号」は、ひとたび狼
場に立つとガラリと変わり、狼
人なら誰もが「これは……」と思
う行動を起こす。尾を振り、鼻

をクンクン鳴らして臭いを取り、
小さな体のどこにこれほどのパ
ワーがあるのかと思うほどの動
きと根性を見せる。頭の良さも
抜群である。どんな岩場ももの
ともしない強くて速い足があり、
逃げるイノシシには素早く掛け
る後ろ足への「咬み」である。

「クマ号」のように小さな犬
でないと大猪は止まってはくれ
ないし、寝屋でじっとしていて
くれない。イノシシを止める犬
は、決して大きい犬でも強い犬
でもなく、小型で普段はおとな
しい犬である。

おとなしい犬は、犬群を作る
のも簡単で、実狼で一番困る友
犬とのケンカもなく、他犬や人
畜に対しても危害を加えること
がないので、安心した狼ができ
る。反対に、強い犬はパックが
組みづらく、個性が強いぶん訓
練も大変である。

「子犬選び」で二番目に考え
てほしいのが「牝」で、良い子
犬を手に入れるということであ
る。特に牝犬は、繁殖を目的と
するので、ことさら「狼人の愛
犬」を自分の目で見て決めなけ
ればならない。性格の良い利口
な狼犬で、「咬み癖」などの悪

い癖のないおとなしい狼の子犬
……ということになるのだが、ま
して認めてはいけないのが「咬
み癖」であり、このような癖の
ある母犬は論外である。

実狼犬を見るとききのポイント
は、身体全体と動きである。よ
く見て「来い来い」と手を差し
伸べたとき、愛くるしいほど尾
を振って近づくと犬なら迷わずO
Kである。また、私の犬達に多
く見られる「シャイ」な犬は、
犬舎の隅で吠えていても、近寄
って来てイノシシでも咬み込む
ような様子があれば、慣れれ
ば大丈夫である。シャイな子は、
人が近づけば自分から遠退くの
で、間違っても咬むことはない。
また、実狼で鍛え上げた狼犬
であれば、身体全体の締まりと、
特に胸の張り、手足の力強さが
ポイントである。誰の目にもは
っきりわかるのが「止め犬」で
あり、イノシシとの攻防で体中
に傷がある。ただし、「吠え止
め犬」は、イノシシを止めても
「全く……」と言ってよいほど受
傷しない。わが家では「クマ号」
がそれに当たる。

いずれにしても、子犬は基本
的に母犬によく似るのであるが、

成長するにつれて猟芸も母犬にそっくりとなるので、母犬をよく見て選ぶことである。父犬が素晴らしく、「牡の子犬が欲しい」ときでも、一腹の中に父犬そっくりの子犬が必ずできるものである。

「単独猟」と言っても、1頭でイノシシを止められるならそれが理想だろうが、「がつちり力でねじ伏せる止め」となると、やはり犬群でなければできない。それゆえ、何頭掛けても仲良くできるおとなしい子犬を求め、二代〜三代かけてパックの完成を目標にするのであるが、これも良い牝犬を持つてこそ達成できるのである。良い牝犬を何頭も持つている…ことほど獵人の強い味方はない。

例えば、イノシシの「止め芸」で一番大切な「鳴き声」とか、訓練ではどのように頑張っても修正のきかない、その犬だけに潜む「極秘の猟芸」がある。つまり、訓練でどんなに「足に行かず」に頭に行け」とか、反対に「頭に行くとやられるから後ろ足に行け」とか、「1m以内で吠え込めなければダメだ」などと言ってみても、これらは獵犬

自体のなせる技であり、訓練で簡単に直せるものではない。

獵犬の芸で特に大切な大猪と対峙しての「間の取り方」とか「鳴き声」、さらに「攻撃する芸」などは、その犬が持つて生まれた本能であることが多い。それゆえ、訓練ですることや、実猟で仕込むのは、その犬の得意とする芸：足に行く犬は足に行くように、頭に行き犬は頭に行くように…これらの芸をひたすら伸ばすことに専念すべきである。

訓練ではできない「本能」と思われるような難しい猟芸でも、良い牝犬さえ育っていれば、二代〜三代先に自分の望む最高の実猟犬が作れ、犬群も完成するのであろう。私が目標としている猪犬は、単独猟で一人でも大猪の獲れる獵犬である。

もちろん、訓練の前にまず「子犬作り」である。優れた猪犬の血が流れている子犬を一流芸を持つた先犬に付け、私自身がその子犬の「本能」まで引き出せるように奮起しているところである。

次に、「繁殖」についても、理想の獵犬を作るために、毎年「狩

獵界」誌で紹介されてきた名種牝犬「富士雄号」を入手するこ

とで種牝群が完成した。良い牝犬群は揃っているの、やっと思いつくおりの子犬ができるようになった。

私の愛犬達には「血統書」はないが、何世代にも亘って良い子犬を送り出しているし、獵人の方々からもうれしい連絡をいただけるようになった。私の繁殖の理念は、一流の猪犬完成のために、実猟で見せる良い猟芸の犬同士を、体験によつて得た知識を通して自信の持てる範囲で、犬種を超えた「自分流の極秘の方法」によつて繁殖していくことである。

少し強めの牝犬は、穏和だが見事に手足の関節攻めをする牝犬と交配させるなどの方法で、

何とか私自身の理想の猪犬作り

●無事、これ名馬なり

人間であれ犬であれ、闘うも



一流芸の「サクラ号」×名種牝「富士雄号」

のにとつては「無事」が何よりであり、これに勝るものはない。まさに「命あつての物種」である。あれほど私を喜ばせてくれた百戦錬磨の「ミス号」まで16年度獵期に散らせてしまった。それと言うのも、私自身の不注意によるもので、何とも心残りである。



16年度獵期、元氣だった「ミス号」(左)と「奈智号」

「ミス号」達の止め現場に駆けつけるのが遅れてしまった。その結果、「ミス号」を死なせてしまった。加えて、成長著しかった8カ月の「ナオ号」(松田氏からのラガー犬・牝)まで失ったのである。

「ナオ号」は、「犬舎に新血を」と求めて求めた期待の星だった。必ずや名猪犬に仕上げるべく「ミス号」に付けて訓練を続けてきたのだった。痛む足を引きずり現場に着いたときにはすでに遅く、見るも無惨な状況で2頭は息がなかった。一瞬、頭が真っ白になっていた。

動転した私は、それでも何とか助からないものかと、腰のタオルで1頭ずつ体を拭きながら大声で名を呼び、動かぬ体を揺すってみたが無駄であった。それでも私に抱き上げられて、「ミス号」も「ナオ号」も満足そう(？)顔に見えた。

激闘の場は荒れ、大きな円形になっていたが、それでも残った犬達は荒猪を追って行き、食らいついているようだ。「ブル号」「クマ号」「ラン号」、そして「クマ子号」の必死で止めている元気な鳴き声がガンガン無線に入

ってくる。かけがえのない戦力を失った私は、2頭の傍にしゃがみ込み、「ごめんミス、ごめんナオ」と、何回も何回も頭を撫でていた。

どれほどの時が過ぎたろうか。やっと我に返った私は、何度も休みながら1頭ずつ車まで運んだ。その間も「ブル号」達の鳴き声が無線を通して入ってくる。私には現場に駆けつける力は残っていないかった。1頭1頭の動きが想像でき、やりきれない思いであった。

あの子達は、決してむざむざと「ミス号」達の二の舞にはなるまい。あの子達は百戦錬磨の、わが犬舎でも選り抜きの精鋭で、例え1頭でもイノシシとやり合える実力犬達だ。心配ではあるが、そう思うことにした。車の椅子を倒し、じっと無線を聞き入る。闘いを終えて戻って来る子達を待った。こんな体験は二度としたくない。

疲れた体を横にして目を閉じると、以前「ミス号」が大猪と闘い、腹を20cmも裂かれたとき、それが思い出された。あのとき、「ミス号」は車の場所まですつ飛んで戻り、待っていた妻



「ミス号」の直子「ケン」

と孫に腹を見せて自分の大事を知らせたのだった。無線で知らされた私は大猪を目の前にしていたが、すぐに戻って仮縫いをしたが、「ミス号」は鳴き声(泣き声)一つ立てずに耐えていた。頭の良い、我慢強い子だった。「ミス号」の顔が次々と浮かんで消え、浮かんで消え、幾多の山での出来事が思い出され、こみ上げてくる。「ナオ号」にしても、「ミス号」が教えた子である。どちらが先にやられたかはわからないが、きつとお互いがかばい合ったに違いない。「ナオ号」は「ミス号」の教えを忠実に守ったに違いない。「ミス号」は、素直で顔立ちも良く、最高の牝犬だった。い

つも笑っているような顔をした耳のピンと立った可愛い子だった。私は「俺の宝だ」と言って彼女を大切にしてきたのである。幸い、「ミス号」は「ダイ号」「イチ号」「クロ号」「ケン号」などを残してくれた。

私の足は、小さなスコップで竹の子を踏み切ろうとした折に、力をかけすぎて踵を傷めてしまった事故で、これが思ったよりひどく、山歩きで踵をかばうあまり、今度は膝までやってしまった。全くの不注意であった。せめて足さえまともなら、いつものように、コケようが滑り落ちようが、止めの現場に駆け



「ミス号」の孫達。
(左)「和号」、(右)「二代目」「竜号」

つけて大猪を撃ち獲り、この子達を守ってやれたはずである。2時間近くもの激しい攻防で私を待っていたのに、全く頼りない主人で救いようがない。言い訳になるが、それでも私なりに一生懸命急斜面を登り、山を一つ越えて裏の沢まで大汗で駆けつけたのだった。

トヨタ自動車の奥田会長の言葉に「勝った時が負けた時」があるが、まさにそのとおりで、「負ける」ということは、このようなことである。闘う者は、いつも心に留めておきたい言葉である。私は、まだ闘っている愛犬を見殺しにするように置き去りにし、「ミス号」と「ナオ号」の亡骸を連れ帰るのがやっとならざらだった。

大猪のやりたい放題に、何の打つ手もない無念さは、とても言葉で言い表せるものではない。「無事これ名馬」…命を落としたり、ケガで動けないようでは、「宝犬」も「猪獵人」もあつたものではない。猪犬である以上、受傷事故は仕方がないことかも知れないが、今度だけは自分の不甲斐なさが原因であり、残念で諦めきれない。

大いに落胆していると、「クマ号」を先頭に4頭が元気に戻って来た。4頭は、一様に「おやじ、何してるんだよ」とも言いたげな顔であった。私は1頭ずつ「よしよし、よく頑張ったな」と、体を拭きながらケガの様子を調べた。幸い、深い傷は「ブル号」に2カ所あるだけで胸を撫で下ろす。

「頑張ったなあ」と、残りのおにぎりを半分ずつ与え、4頭を箱に入れた。このとき心の中、この子達のイノシシに懸ける闘志を見たようで、少し元気をもらったような気がした。まったく、あの敗戦の中でさらに1時間以上も攻防を繰り返して無事に帰って来たのだ。置き去りにした主人を信じて、駆けつけるのをひたすら待ち続けていたのだ。何ともすごい子達だ。

気を取り直し、いつものように「よし、帰るぞ」と大声で言っただけだが、どうしても「ミス号」のことが頭から離れない。「ミス号」の子犬は、福島県の蒔田さん、兵庫県赤穂市の主田さん、そしてわが獵友の徳島の西岡さん(「こぶし号」)に引き取られ、話を聞くと、皆「ミス号」



来る獵期一軍入りの「ケン号」。「富士雄号」の後に続く種牡有望犬

の獵芸そっくりに仕上がりに、素晴らしい子達だと言う。何とも、嬉しいかぎりである。

あの美人顔の「ミス号」が大猪相手に歯をむき出し、背毛を逆立てラウンドをかけた時、左右にフェイントをかけたが突進する様子が今もって頭を離れない。「ありがとう、ミス。また生まれ変わっても私を助けてほしい」と、祈らずにはいられなかった。

その後、二代目「ミス号」と名づけた子は、初代「ミス号」とは似ても似つかぬジャジャ馬で、一緒に犬舎に入っている「ケン号」を悩ませている。体形だけは初代に似ているのだが…私の中に「ミス号」の笑顔が残



赤穂市・主田氏の訓練。「ミス号」の子犬

ついでに、「ミス号」に
近づくと芸を見せてもらいたいも

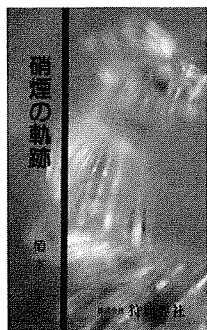
のである。
今度のことは、よくある猪犬

の運命^{さだめ}などではない。全てが私の責任である。これからは山を知り、わが身を鍛えることを第一とし、自己管理をきちんとすること、愛犬の力が全て出せるような猟法をとることを心がけようと思っている。そして、「いざ決戦」のときは、イノシシとの攻防に全精力を集中させ、「必ず勝つんだ」の信念のもとに闘おうと思っている。

猪猟においては、負けたら何も残らない。それどころか、「ミス号」「ナオ号」のような、苦く辛い思い出がいつまでも心を支配する。「体調がすぐれない」とか「老いたから」とか言っても、単独猪猟は妥協が許される世界ではない。荒猪が子犬や老犬に対して手加減しないように、実戦においては「待ったなし」の一発勝負である。ゆめゆめ「何とかなるさ」のような妥協はしてはいけない。

私は、イノシシの単独猟をするからには、老人とて常にバリアの現役の「単独獵人」であり続けなければならないと思う。そして、命を懸けて大猪に挑む愛犬もまた守り続けていきたいと思う。

(つづく)



植木 皐 著

好評発売中！ 硝煙の軌跡

B6変型判

最後まで一気に読める狩猟人生論！ 定価1,365円(税込) 290円

狩猟家なら、誰でも体験することでありながら、著者の鉄砲人生の試練を乗り越えた自己省察には、数々の教訓があり、感動のエピソードが盛り沢山！ わが狩師を語り、狩猟人生のモラルを語り継ぐ、21世紀への狩猟教本！

——お求めは最寄りの書店または前金にて直接下記本社へ——

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-21

発行 (株)狩猟界社 電話 03(3292)1211(代) 郵便振替 00130-0-70665